

学力多様化で対応苦慮...教科書会社

多様化する高校生の学力に対応するには、どんな教科書を作ればいいのか、教科書会社が頭を悩ませている。

漫画多用、新出英単語4割増

文部科学省が30日に公表した高校教科書の検定結果を見ると、数学の苦手な生徒のために漫画を多用したり、大学受験をにらんで単語数を大幅に増やしたりと、各社の苦心の跡がうかがわれる。

「学校現場の要望に応じて内容を工夫するのが大変」。複数の教科書会社の担当者はそう語る。

啓林館（大阪市）の「数学2」は、来春から使われる易しいレベルの教科書で、各章の冒頭に漫画を入れた。主人公の高校生たちが数学者などとやりとりする場面が描かれ、担当者は「数学が苦手な生徒が思わず開いてみたくなる教科書を作ろうと考えた」と話す。

申請段階では、全体の約2割のページを漫画に割いたが、文科省から「学習内容との関連が不明確」などとして約100か所の修正を求められ、最終的に、漫画の分量は当初の4分の1にまで減った。

同社は漫画を多用した「数学1」の教科書も作っている。4月からこの教科書を使う都立高校の数学教諭は「分数がおぼつかない生徒もいる。漫画なら数学の敷居が低くなる」と期待する。しかし、この教科書のシェアは0・5%。担当者は「教師の間にはまだ漫画への抵抗感が強いのかかもしれない」と話す。

一方、15社、34種類の教科書が競合する「英語2」。文英堂（京都市）は今回、進学校にアピールしようと、新出単語数を約4割増しにした。同社は以前、ゆとり教育に対応するため、進学校向けの高いレベルの教科書で、単語数を抑えた。しかし、学校現場から「難関大学の入試レベルは変わらないので、語彙（ごい）力は下げられない」と敬遠され、シェア1位から転落した苦い経験がある。

ある教科書会社の担当者は、「大学全入時代を迎え、昔ほど必死に勉強しなくても大学に入れる、と考える中間層の生徒数が増えてきた」と分析。こうした中間層向けの教科書について、別の担当者は「内容を絞り込めない」と打ち明けた。

(2007 年 3 月 31 日 読売新聞)